

平成4年6月10日印刷 平成4年6月15日発行(昭和28年9月25日 第三種郵便物認可 毎月1回(15日発行))

ISSN 0916-8095

NDR 1992 VOL. 6

NO.510



「美しい村」を訪ねて

うりやうながひろ
瓜 生 隆 宏



1. 美しい村へ

私は長らく、「美しい村」とはどのようなものかという疑問をもち続けてきた。我々の意識の中に美しい村は確かに存在するのだが、何が美しい村の条件であるかを具体的に説明するのは難しい。それは、絵画の美しさを言葉で説明せよと言うくらい難しい意味のないことかもしれない。しかし一方で、だれしも美しい村や美しい町にここが、住んでみたいと願っている。

このような素朴な疑問を持つ私が、一度訪れた村があった。それは、ドイツ食料農林水産省が行っている Unser Dorf soll schöner werden 「わが村を美しく」運動で表彰された村である。この運動はドイツ食料農林水産省が1961年から全国規模で展開している、農村景観を保ち、さらに村々を美しくしようという運動である。私は、村の美しさという抽象的なものをコンテストにして評価し、表彰までしてしまうという政策に興味をもったのである。幸運にも、昨年10月に県の若手職員海外研修制度を利用して、この運動によって表彰された村の一つを訪ねる機会を得た。現地では、オーバーバイエルン地方事務所のエーデルスブルガーさんにお世話になった。

2. 「わが村を美しく」運動がめざすもの

この運動は伝統的なドイツの農村景観を残そうということで1961年から始まった運動である。2年おきにコンテストがドイツ全国規模で開催され、金賞、銀賞、銅賞の三段階で美しい村が表彰される。審査は2年がかりで行われ、最初の1年は各州ごとに代表を決め、次の1年でドイツ全国

大会を行う。表彰される村の数は必ずしも一つずつでなく、参加する村の数によって変化する。参加できる村は人口3,000人以下であることが条件である。そのなかで、600人以下の小人口の村を対象にしたクラスとそれ以上の人口のクラスの2部門に分けられている。1989年ではなんと5398村がコンテストに参加している。

表彰を受けたことによってその農村が何か賞金みたいなもので潤うのかとエーデルスブルガーさんにたずねたところ、表彰されたことの名誉だけだとのこと。村人にとってこの名誉というのは大変なものらしい。自分の住む村が美しいということに何よりも誇りに思っているドイツ国民がうらやましいと思った。



村の入口にあるキリスト像
日本の道祖神といたるところか。

さて、伝統的なドイツの農村景観、つまりドイツの田舎らしさを残そうというのがこの運動の目的だと先に書いてしまったが、コンテストの目的について聞き取っていくうちに、どうも目的はそれだけではないことがわかってきた。それは、こ

のコンテストに参加することによって地域のコミュニティ活動の盛り上がりも狙っているのである。審査基準にもコミュニティの活動について問っている項目がある。すなわち、自らの村を美しくしたいという人々の行動によって村の外面も、村に住む人の心、すなわち内面も美しくあれという運動のようである。こうすることによって自ら住む村の愛着、ひいては国土を愛するところが醸成されるのではあるまいか。もちろん、自分たちが住む村が誇れるほど美しくければ、村を捨てる（過疎になる）ことも少ないだろうし、さらに美しくしたいと願うのが住民の願いであろう。このような精神的な運動が成功しているドイツの地域政策の奥の深さを感じた。

3. 美しく住まう所

午後から、この運動で金賞を受けた村のひとつを訪れた。ミュンヘン中央駅から国鉄とバスを乗り継いで約45分の Neufahern という村である。村の規模は人口200人、牛200頭、農家は20軒である。ミュンヘン中央駅から45分ほどの距離であることから多くの住民はミュンヘンへ働きに出ている人が多いとのことである。

我々は歩いて村を一周した。ゆっくり歩いて1時間ほどである。まるで、手入れされた庭園を巡っていく気持ちであった。確かに景観に対する住民の心配りがいたるところで感じられた。

住民は農家よりもサラリーマンが多いらしいが、ドイツでは自分の住む村は、日本の大都市郊外のニュータウンのような単に寝床があるだけのベッドタウンでなく、まさしく美しく住まう所なのである。私は今回の訪問で、自分たちが住んでいるところを大切に、自分たちの手で住みやすくしていくというごく当たり前のことが、ドイツでは着実に行われていることを、知らされたのであった。



花が咲き誇る庭園のような村内

最後に、私が美しい村を訪ねるきっかけとなった詩の一篇を紹介して括りたい。

どこかに美しい村はないか
一日の仕事の終わりに一杯の黒麦酒
鎌を立てかけ 籠を置き
男も女も大きなジョッキをかたむける

どこかに美しい村はないか
食べられる実を付けた街路樹が
どこまでも続き すみれいろした夕暮れは
若者のやさしいさざめき満ち満ちる

どこかに美しい人と人の力はないか
同じ時代をともに生きる
したしさとおかしさとそうして怒りが
鋭い力となって たちあらわれる

「六月」／茨城のり子詩集「見えない配達夫」より

(兵庫県三木土地改良事務所 主査)